

浄土宗、山号は^{とうのおさん}塔尾山。本尊は如意輪観音。本堂の背後には、吉野で崩御した後醍醐天皇の陵・^{とうのおの}塔尾^{みさき}陵がある。金峯山寺、吉水神社などがある吉野山から谷ひとつ挟んだ山の中腹。山門を入ると正面に寄棟造檜皮葺きの如意輪堂（本堂）左方に庫裏、宝物殿、一段高いところに多宝塔がある。



平安時代の延喜年間（901 - 922）に日藏上人により開かれたと伝わる。南北朝時代、後醍醐天皇が吉野に行宮を定めた際に勅願所とされた。天皇は還京叶わぬまま崩御して本堂裏山に葬られた。以来寺運は衰えたが、1650年、文誉鉄牛上人により本堂が再興され、その際、真言宗から浄土宗に改宗した。

金剛蔵王権現木造（重要文化財） 仏師源慶の作、1226年。吉野曼荼羅を表した厨子も絵画資料として貴重なもの。

他に南北朝時代に、楠木正行が四條畷の戦いに出陣する時の辞世の歌が刻まれた本堂の扉が残っている。

かへらじと かねて思へば梓弓 なき数にいる 名をぞとどむる



1. 後醍醐天皇の生涯

即位と倒幕 1288年11月26日、大覚寺統・後宇多天皇の第二皇子として誕生。1318年、31歳で即位したが、次第に鎌倉幕府との対立を深めていく。

1324年、後醍醐の鎌倉幕府打倒計画が発覚、正中の変が起こる。計画は失敗に終るが後醍醐はその後も密かに倒幕を志し、1331年、側近吉田定房の密告で再び計画が発覚して急遽京都脱出、笠置山に籠城するが、圧倒的な兵力を擁した幕府軍の前に落城して捕らえられる。

流罪、復帰、建武の新政へ 隠岐島に流された後醍醐は2年後の1333年、名和長年を頼って隠岐島から脱出し挙兵、鎌倉の追討軍の足利高氏は後醍醐方に味方して六波羅探題を攻略、同時に関東で挙兵した新田義貞は北条氏を滅亡させた。

帰京した後醍醐は皇子の恒良親王を皇太子に立て、皇統を独占する意思を明確にし、中国的な天皇専制を目指した。しかし、性急な改革や恩賞の不公平、朝令暮改を繰り返す政策、貴族・大寺社から武士にいたる広範な勢力の既得権の侵害や非現実的な経済政策など、その施策の大半が政権批判へとつながっていった。

足利尊氏の離反、そして南北朝へ 1335年、乱の鎮圧のため東国に出向いた足利尊氏が、付き従った将士に鎌倉で独自に恩賞を与えるなど新政から離反。後醍醐は新田義貞に尊氏追討を命じ、楠木正成や北畠顕家らとの連合軍に敗れた尊氏は九州へ落ちるが、翌年に九州で態勢を立て直して、神戸の湊川で新田・楠木軍を破る。



京に入った足利尊氏は光明天皇を擁立して、建武式目を制定、幕府を開設。ところが後醍醐は幽閉されていた花山院を脱出し、吉野に自ら主宰する朝廷を開き、京都朝廷（北朝）と吉野朝廷（南朝）が並立する南北朝時代が始まる。後醍醐は各地に自分の皇子を送って北朝方に対抗しようとしたが病に倒れ、1339年8月15日、吉野へ戻っていた義良親王（後村上天皇）に譲位し、翌日、朝敵討滅・京都奪回を遺言して崩御した。享年52（満50歳）。

2. 楠木正行の肖像

生誕 河内の土豪、楠木正成の長男として河内国に生まれた。幼名は多聞丸。生年については明確な史料が存在しない。「太平記」には父との「桜井の別れ」の当時は11歳であったとあることから1326年頃と推測される。

桜井の別れ 1336年5月、九州から東上してきた足利尊氏の数十万の軍勢に対し、その20分の1ほどの朝廷軍は、新田義貞を総大将に兵庫に陣を敷いた。楠木正成は和睦を後醍醐に進言したが入れられず、死を覚悟し湊川の戦場に赴いた。

その途中、摂津の桜井の駅の付近で、正成は「最期まで父上と共に」と懇願する正行に、「帝のために、忠義の心を失わず、いつの日か必ず朝敵を滅せ」と諭し、形見に帝より下賜された菊水の紋が入った短刀を受け、今生の別れを告げた。

四条畷の戦い 湊川の戦いで正成が戦死した後、衝撃のあまり形見の短刀で自刃しようとしたが生母に諭され改心、父の遺志を継いで武将となるが死を覚悟していた正行は、後村上天皇よりの内侍賜嫁（嫁取り）を辞退して、その時の歌が

とても世に 永らうべくもあらう身の 仮のちぎりを いかで結ばん

1348年、河内国北條（現在の大阪府四條畷市）で行われた四條畷の戦いで、足利側の高師直・師泰兄弟と戦って敗北し、弟の正時と共に自害。22歳であった。

この決戦を前に正行は弟・正時や和田賢秀ら一族を率いて吉野行宮に参内、決死の覚悟の一族・郎党143名の名前を如意輪堂の壁板を過去帳に見立て、その名を記して、その奥に辞世の歌を書き付け、自らの遺髪を奉納したという。

かへらじと かねて思へば梓弓 なき数にいる 名をぞとどむる

3. 太平記私考

大楠公の歌 この歌は明治36年に作られた「大楠公」という題の歌で、たぶん大阪人に甲子園球場の「六甲おろし」と同じようにお馴染みなのは、「太平記の里」で売る千早赤坂村のお陰でしょう。ちなみに歌詞は15番まであって、「桜井の訣別（わかれ）」、「湊川の戦い」、「正成の死」が哀切を持って語られるのです。



青葉茂れる桜井の 里のわたりの夕まぐれ 木の下陰に駒とめて
世の行く末をつくづくと 忍ぶ鎧の袖の上 散るは涙かはた露か
正成涙を打ち払い 我が子正行呼び寄せて 父は兵庫に赴かん
彼方の浦にて討ち死せん 汝はここまで来つれども

とくとく帰れ故郷へ

(以下長いので略)

二条河原の落書 後醍醐天皇の「建武の新政」は表面上は幕府から天皇親政による古代政治への復権だったが、しかしその実態は、性急な改革や恩賞の不公平、朝令暮改を繰り返す法令や政策など、その施策の大半が武士勢力の大きな不満に繋がり、京の二条河原にはその無能を批判した落書が現れた。

近頃都二ハヤル物 夜討 強盗 謀綸旨 召人 早馬 虚騒動
生頼 還俗 自由出家 俄大名 迷者 安堵 恩賞 虚軍
本領ハナル、訴訟人 文書入タル細葛
追従 讒人 禅律僧 下克上スル成出者

ところが太平記には、後醍醐天皇を鎌倉幕府の悪政から蘇らせた聖帝として描かれている。例えば帝は流通の円滑化を図って大津と交野（枚方）とを除く関所を廃止し、また元徳2年（1330）の凶作の年には、二条に飯屋を設けて都の庶民のために米を安く売らせたりしている。さらに後醍醐帝の姿が、同時代の記録「保暦間記」に、『当今（とうぎん）ハ近此ノ明帝ニテ御座シケル程ニ、御政モ目出度テ……』と描かれているように、清新の気に満ちて善政を行なおうとしたことは事実であろう。古代中国の理想の社会は「堯と舜」のような、徳を持つ一人の聖王が絶対的な力で治める国とされる。しかし後醍醐帝の生きた中世は、古代の帝王のように一人の絶対者に国益の全てを集中出来るような社会ではなかった。貴族や武士や寺社や商人たち、社会のあらゆる階層の人間達が複雑に絡み合っって自らの権威を追い求めた時代であった。間違いなく帝は時代の流れに棹を差

せなかった哀れな指導者であり、帝の一挙に参集した楠木正成らは、そのことに気付きながら、戻ることの出来ない坂を登って行ったのである。

バサラ大名 二条河原の落書の作者は、建武政権だけではなく混乱期の都を我が物顔に闊歩する武士や民衆の振る舞いにも、批判の目を向けている

為中美物いなかびぶつニアキミチテ マナ板烏帽子ユカメツ、
気色メキタル京侍 タソカレ時二成ヌレハ
ウカレテアリク色好いろごのみ イクソハクソヤ数不知しれず
内裏ヲカミト名付タル



為中美物というのは珍しい食べ物といったものだろう。軽薄な流行や伝統文化に逆らった風俗がこの時代に流行ったのであろう。

「バサラ大名」という言葉もこの時代のもので、世間の常識を越え、時代の秩序を無視して奔放に生きるものを「バサラもの」と称した。足利尊氏とともに立ち、守護大名となった佐々木道誉は、大名でありながら奇想的な振る舞いで、また連歌などの文芸や立花、茶道、香道、笛などを好み、「バサラ大名」と呼ばれた。彼は守護大名でありながら、領内の野武士や野盗集団とも付き合ったといわれるから、まさに南北朝時代という政治秩序不在を代表する人物だったのであろう。

後醍醐天皇 帝の北条討伐の企てが鎌倉方に発覚し、京を脱出するのは天皇即位から13年後の44歳の時、この時代には老齢に近い。それから3年足らずの京での「建武の新政」の時代を挟んで、52歳で吉野の行宮に客死するまでの8年間、帝は戦い続けることになる。

後醍醐帝は多才で精力的な帝王だった。琵琶と笙を巧みに奏し、「建武年中行事」を自ら執筆し、和歌は15歳の時から150首以上も残している。前半世を鎌倉幕府に実権を握られた天皇として鬱々とした日々を過ごした帝は、自ら実権を握った3年間に帝王としての全てを注ぎ込もうをしたことは間違いない。

一方で太平記は「建武の新政」の頃の宮廷の様子を次のように書いている。

『男は烏帽子えぼしを脱いでもどり髻もとどりを放ち、法師は衣を不着して白衣になり、年十七八なる女の、膚はだ殊はだに清らかなるを、二十余人、スズシひとえの単衣ばかりを着せて』

ほとんど裸体に近い男女が、夜毎酒を酌み交わし宴を張っていたというのである。後醍醐帝が隠岐や吉野の行宮でも同じことを繰り返していたとしたら、帝に従った武士たちにとって、それは哀しい風景だったに違いない。

大義 太平記には儒教的な大義名分論と君臣論が基調にある。それは鎌倉時代に伝わった宋学、特に朱子学の影響にあるといわれ、後醍醐帝は特に朱子学を好んだ。朱子学はその後の日本社会に大きな影響を与え、これがのちに水戸学として幕末の尊王攘夷運動、さらに太平洋戦争前の皇国史観へと繋がっていった。

作家の城山三郎さんは「大義」と言う言葉を信奉して軍隊に入り、そこにあった将校達の退廃した姿に絶望して、それが作家活動の原点になったとエッセーに書いているが、河内の無学な土豪に過ぎなかった楠木正成は、流行の「義」と言う言葉に背中を押されて後醍醐帝に従い、その真実の姿に絶望しながら、「義」のために死なざるを得なかった、最初の日本人になったのである。

後南朝 後南朝最後の皇子「自天王」が、北朝の赤松一党のテロリストに襲われたのは1457年12月2日、自天王は弟の忠義王ともども惨殺され、賊は二人の首と神器を奪って逃走した。川上村の伝承によると、後南朝の遺臣等は北朝方の襲撃を恐れて、大台ヶ原山の麓の入の波から、伊勢の国境大杉谷の方へ入った人跡稀な山奥に移り、そこに御殿を建て、神爾は洞窟の中に隠していたという。

後醍醐天皇から数えて4代、57年に渡る南北朝の抗争は1392年、後龜山天皇が足利方の講和を容れて京都へ還幸した時に終わった。しかし皇位を交代で継ぐという約束を北朝方が守らなかったため、1410年怒った後龜山天皇は吉野へ出奔、その後50年余りが後南朝と呼ばれる時代になる。しかし、それはかつての南北朝時代のような抗争ではなく、後醍醐天皇の末裔を称する皇子が南朝再興と称した反乱にしか過ぎなかった。北朝方は吉野の山中に蟄居する皇子を探し出しては、処刑し、流罪にし、僧籍に落としたりした。ある意味それは、報奨金目当ての獲物狩りのようなものであった。後醍醐帝は生涯に33人以上の妃嬪を持ち、ほぼ同数の皇子皇女をもうけた。確かにその子孫は多く居たに違いないが、後醍醐帝が死んでから100年以上も経つころには、その血筋が本当かどうか分からない皇子も居たはずで、彼らの中には訳も分からずに処刑された若者も居ただろう。

しかし、吉野の山中には北朝の追撃を逃れた生き残った皇子も沢山居たはずで、彼らは今も南朝の再興を願って生き続けている、そんなことが現実でありそうなほど、吉野の山は深い。 (参考 インターネット、パンフレット)

